

東京医科歯科大学 献体の会会報

けんたい

第47号

発行／東京医科歯科大学 献体の会
〒113-8519 東京都文京区湯島1-5-45 03-5803-5147
国立大学法人 東京医科歯科大学医学部臨床解剖学分野内



山里の朝

撮影 時田 義彦

目次

ご挨拶

東京医科歯科大学医学部長

北川 昌伸

東京医科歯科大学歯学部付属病院長

水口 俊介

《東京医科歯科大学関係行事》

解剖体御遺骨返還式及び感謝状贈呈式

田中雄二郎

挨拶

東京医科歯科大学学長

小倉 佑太

感謝のごとば 学生代表

田中雄二郎

東京医科歯科大学篤志献体活動の報告会

小倉 佑太

ならびに東京医科歯科大学献体の会総会

田中雄二郎

令和三年度解剖体追悼式

田中雄二郎

追悼の辞 東京医科歯科大学学長

佐藤 達夫

追悼の辞 献体の会会長

長谷川海翔

追悼の言葉 学生代表

長谷川海翔

《篤志解剖全国連合会関係行事》

第四十五回篤志解剖全国連合会団体部会・大学部会合同
研修会ならびに第五十一回篤志解剖全国連合会総会

《会員寄稿》

【随筆】

「墓じまご」のこと

中村 和子

「アー」ちゃんとのんちゃんの不思議な出逢い

三浦 教子

健体を献体〜人流・コロナ禍の街〜

吉本 亮三

かめとん

岡本 祐子

【詩】

照井 きぬ

【短歌】

富沢 静子

【俳句】

衣笠 紀子

真柄百合子 新島 里子

堀田 満

岩崎 治子 山口みどり

濱田裕紀子

水谷喜多子

【川柳】

《東京医科歯科大学献体の会会則》

《東京医科歯科大学献体の会役員》

《東京医科歯科大学からのお知らせ》

《会員の「家族へのお願ご》

《会報作成にあたって》

◎表紙の写真説明

◎編集後記

◎連絡先

《ご挨拶》



東京医科歯科大学

医学部長

北川 昌伸

二〇一七年一月より東京医科歯科大学医学部長を拝命しております北川昌伸でございます。

献体の会の会員の皆様には、平素より東京医科歯科大学の教育・研究に対し、深遠なるご理解と多大なるご協力を賜り、誠にありがとうございます。心より御礼申し上げます。

東京医科歯科大学は、二〇二〇年一〇月に世界最高水準の教育研究活動の展開が見込まれる大学として指定国立大学法人の指定を受けました。指定国立大学法人となった本学には、国際的な競争環境の中で、世界の有力大学と伍していくことを求められ、社会や経済の発展に貢献する取組の具体的成果を積極的に発信し、国立大学改革の推進役としての役割を果たすことが期待されています。また、本学は新型コロナウイルス感染症に対する対策にも注力する大学としても注目を集めています。このような情勢の中、本学は「知と癒しの匠を創造し、人々の幸福に貢献する」を教育理念として掲げています。これを具現化するため、本学の教育現場では、どのような状況になっても人類の健康・福祉の増進を通じて平和な社会の実現を志し、診療・研究を通じて人々の幸福に貢献する人材を養成することを目標としております。本学に入学した学生は、一年次に教養部において幅広い教養と豊かな人間性、高い倫理観、自ら考え解決する創造性と開拓力、国際性と指導力を備えた人材となるべく準備を開始いたします。新型コロナウイルス感染症拡大の影響で対面での講義や実習が行えないことも多く、Webシス

テムを活用しての教育も増えていきます。その中でも入学約一年後には医学・歯学の勉強を始めてすぐに人体解剖学実習を経験してもらっています。医学教育の最初の段階で医療人としてのキャリア形成の入口に立つ学生たちに対していかなる教育を提供していくかということ、わが国の将来の医療に大きな影響を及ぼすことになり、非常に重要なものです。多くの学生たちはこの実習に先立ち初めて「献体」について知ることになるわけですが、「自分の死後、遺体を医学・歯学の教育と研究のために役立てたい」というお考えを持った方々がいることを知り、今まで身近に感じたことの少なかった「生と死」について深く考えることとなります。「死」というものに直面してそれをどのようにとらえ、考えるのか。このようなことを教育現場で非常に強く語りかけてくれるご遺体を通じた解剖学実習は、献体の会の皆様方のように生あるうちに自らの死を客観的に受け入れて、医学・歯学の教育のために自らの身体を捧げられた尊いお志を受け止める心として間違いなく学生自身の中に一生残っていくものとなることと考えられます。将来、人々の健康や生命を守り抜くことの困難さに直面した際に、それを乗り越える勇気を与えてくれるのが、解剖実習を通じて献体された方々から授かった心であり、その心を大切にすることで医療人としての道を歩み続けていけるのだと思います。我々が実践すべき教育の現場では、こうした尊いご遺志に対して、心より敬意を表しつつ、医学・歯学のさらなる発展のためにこれまでも増して精進していくことがご遺体をいただいた方々にご遺族の皆様のご厚情に報いることに通ずると信じております。

人体解剖学実習では、人体の構造の精緻さ、複雑さ、不思議さを学ぶとともに、お一人お一人の身体の様性に触れることとなります。それぞれのご遺体はそれぞれのお立場で医学・歯学の進歩に寄与するだけでなく、人間教育の上でも何ものにも代えがたいご教示をいただき、学生に多くのことを教え導いて下さいませ。また、人体解剖学実

習では数人の学生がグループとなって学習・実習を進めていきます。チーム医療や社会への対応・貢献といった視野を開いていくことに役立ちます。献体をされた方々のご遺志に導かれて、学生たちは医療人として活躍できるよう羽ばたき始めるのです。

私は二〇〇五年より医学部包括病理学分野を担当しております。学部での教育・研究に携わるとともに医学部附属病院においては病理部という部門で患者さんの生検・手術材料の診断や病理解剖を行っています。毎年出席させていただいております。その際には献体の会の皆様、献体をされた方々の崇高なるご遺志、そしてご親族の皆様の深いご理解とご厚情に接することができ、学問の発展とそれを支えて下さる方々の心情との結びつきに大いなる感銘を受け、深甚なる感謝の気持ちで満たされております。このような心を持つことは、学問に精進すると同時に、良き医療人を育成することへの社会からの期待と教育の場の責任を改めて強く感じることに通じ、日々の修練にも気概を持って臨ませていただいている次第です。

最後になりましたが、献体の会の会員の皆様方には、東京医科歯科大学の教育・研究に深いご理解とご協力を賜りますとともに、益々ご健康に留意されますようお願い申し上げます。皆様方の末永いご多幸をお祈り申し上げて、ご挨拶とさせていただきます。

《ご挨拶》



東京医科歯科大学

歯学部附属病院長 水口 俊介

令和二年四月より東京医科歯科大学歯学部附属病院長を拝命しております水口俊介と申します。献体の会の皆様におかれましては、平素より本学の教育並びに研究に対して多大なるご理解とご協力を賜りありがとうございます。

私の専門は義歯、それも歯が一本も残っていない患者さんを作る全部床義歯（総入れ歯）です。総入れ歯は歯が一本も残っていないのに歯ぐき（顎堤といいます）の上で吸い付いて離れず、顎を動かしてもずれることなく食物を咀嚼することができるとは、適当に型を取って作ってもそのようなにはなりません。顎堤のまわりには舌や唇、頬つぺたなど活発に動く組織があり、それらの形や動きをよく把握して、それに調和した形にしなければなりません。そのためには口や顎の解剖をよく理解しておくことが重要なのです。私が全部床義歯の医局に入局して先輩からまず言われたのは「解剖を勉強しろ」でした。私は本棚に眠っていた解剖の教科書を五年ぶりに引っ張り出し、さらに口腔解剖の専門書を購入し勉強いたしました。また教室には全部床義歯の老教授と有名な口腔解剖の教授が、義歯の周囲の解剖について対談している大変印象的なビデオがありそれを見て勉強いたしました。いまでも新入医局員にはまず「解剖を勉強しなせ」です。まあ一九三〇年に書かれた本の内容が今でも生きています。現在は、デジタル技術を用いて義歯を作る研究が進んでいます。義歯の形を決定

する要因は変わりません。従いまして、歯科医師や歯科技工士の習得すべき解剖に関する知識や意義は変わらないといえます。

人体解剖学実習は二年時に行われるのですが、その知識の重要性は臨床を学んでからより明確に認識するようになります。二〇一一年から歯学科では新しいカリキュラムが導入されました。それは、さまざまな授業や実習を医学科と歯学科の学生が同時に同じ教室で受けるカリキュラムです。人体解剖学実習も両学科の学生たちが分担して行っています。解剖学実習は六年間の医学歯学教育の中で最も印象的な授業であり、この実習を通して、これから五年間続く厳しい学部での勉学を成し遂げる覚悟と、医療人として生涯続く研鑽のための動機を医学科の学生も歯学科の学生も形成いたします。

また歯学科のカリキュラムでは五年次、臨床実習に入る直前に頭頸部臨床解剖という授業を実施しています。それまでに学んだ歯科医学の知識を踏まえて、もう一度ご遺体を解剖させていただくのです。二年生の時には無我夢中で行っておりましたが、五年生ではターゲットを見定め目的意識を明確にして、冷静な気持ちで解剖実習を行うことができます。そしてそれまでに得た知識を三次元的なイメージの中でとらえることができるのです。さらに、これから実際の患者さんに対象とした臨床実習に望むのだという意識を強くしてくれます。このように崇高なご遺志をもってご献体いただいた故人と献体の会の皆様のご理解のおかげで、医療人としての教育は完成するのだと思います。

もう三〇年以上前になりますが、私の伯母は愛媛大学医学部附属病院のそばに住んでいた関係もあり、献体の会に登録しておりました。その伯母が心筋梗塞で急死し、葬儀に駆け付けたのですが、葬儀が終わった後、大学からお迎えの車が来て伯母は運ばれていきました。通常は遺体が火葬場で骨に変わり、骨壺に収めることで家族は故人が亡くなったことを受け入れるものだと思います。従いまして、何とも言えないぽっかり寂しい気持ちになったことを覚えています。その時に、

本学の献体の会のご遺族の皆様も同様な気持ちを感じられたのではないかと思います。医療人として、故人やご遺族のご意思やお気持ちに応えなければならぬという決意を新たにすることがございます。

このように、人体解剖学実習は医学歯学を志す者にとって大変重要な授業です。ご献体をいただきました方々並びにご遺族の皆様の尊いお志に報いることができますよう、医学歯学のさらなる発展と将来のリーダーの育成のために日々努力を重ねてまいります。

最後になりましたが、献体の会会員並びにご遺族の皆様方の末永いご繁栄とご多幸をお祈り申し上げまして、ご挨拶とさせていただきます。

《東京医科歯科大学関係行事》

解剖体御遺骨返還式及び感謝状贈呈式

令和三年二月十五日（月）、十六日（火）の二日にわたり、東京医科歯科大学M&Dタワー二階の共用講義室一・二において、第三十七回東京医科歯科大学解剖体御遺骨返還式及び感謝状贈呈式が執り行われました。今年度は、新型コロナウイルスの感染拡大防止に配慮し、三つの密（密閉・密集・密接）を避けるため、参加されるご遺族に対しては、二日間の午前・午後をさらに数枠に分けてご来場いただき、教職員も限られた者のみ参加了しました。

初日は、朝から静かに雨の降る日でした。建物の外、駐車場、エレベータ前に待機する大学職員が、お一組、しばらくして、またお一組とご遺族を共用講義室一に導きます。そこは階段状に座席が設けられた教室で、席が後方に行くほど高くなっています。この最新医学の講義・講演が行われる教室を控え室として、お一組ごとに式の会場である隣室に案内します。

開かれた扉の下部には、ご遺族を迎える式の看板が掲げられています。部屋に入ると、中央に白い祭壇があり、その両側には、白百合、かすみ草、真白のカーネーション、薄紫のスイトピー、桃色の金魚草、浅紅色のバラが溢れるように活けられ、厳かなながらも春らしい空間となっています。

やがて献体成願者のお名前が告げられると、礼服白手袋の職員がお名前の札が貼られた御骨箱を掲げて祭壇に据えます。ご遺族も祭壇の前に並び、代表が前に進みます。参加者全員が御骨箱に深く一礼した後、祭壇の向こう側に立つ解剖学教室教員の手からご遺族代表の手へと御骨箱が受け渡されます。

そこから先は、各々の再会の場面です。御骨箱を受け取られた代表

者のもとに、ご家族が集まり、慣れ親しんだ愛称で呼びかける姿や、お帰りなさい、よく帰ってきた、と呼びかける姿、御骨箱を堅く腕の中に抱える姿、御骨箱を何度も撫でる姿。その姿のいずれにも、長く会えなかった家族にようやく会えたという安堵の思いが満ちていました。

次いで、文部科学大臣感謝状感謝状が手渡され、御遺骨返還式及び感謝状贈呈式は滞りなく終了しました。



ご挨拶

東京医科歯科大学

学長 田中雄二郎

この度は、本学のより良き医療人、知と癒しの匠育成の為にご献体くださいました方々のご遺族の皆様は、知と癒しの匠育成の為に、御礼を申し上げます。

本来であれば、ご遺族の皆様は直接ご挨拶を申し上げたいところですが、いまだに猛威を振るう新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点から、今年度は郵送でのご遺骨の返還または規模を縮小したご遺骨返還式を開催させていただくことといたしました。

さて、今日の医学・歯学の進歩は目覚しく、様々な領域で新しい知見が集積し、その上テクノロジーの進歩と相俟って、新しい医療技術が開発され、人々の健康と社会の福祉に大きく寄与してまいりました。しかし一方では、ヒトの生命そのものに携わる医療人には、今まで以上に社会的責任や医療倫理が問われております。

医学生・歯学生在が専門課程に進み、ヒトのからだに直接接する最初の経験が、人体解剖学実習であります。

ご遺体を通して人体の構造や機能の基礎を学びつつ、生命とは何かに思いを馳せ、その神秘性と尊厳に触れることとなります。

まず学生は戸惑い、畏れを感じるようになりますが、やがて奇跡とも思えるその精緻な人体の構造を知ることになり、これまで経験したことのない生命に畏敬の念を抱くこととなります。

同時に、自らの御身体を医学・歯学の発展のためにささげるといふ献体という行為が如何に崇高なものであるかを感じ理解することとな

ります。

そして、そのことに心から感謝しつつ、医療人としての教養と感性を研ぎ澄ましてまいります。

医学の進歩とともに、医の倫理・生命倫理が強く叫ばれておりますが、解剖学実習に献じられたご遺体は無言のうちに「医の倫理とは何たるか」を学生に語りかけてくださっているのです。

結びに、献体という崇高なご遺志を尊重し、今日までご遺体を私どもに委ねて下さいましたご遺族の皆様は、寛大さと寛容に深く感謝の念と敬意を捧げる次第であります。

私も医学・歯学教育に携わるものならばに学生たちは、皆様のご尊いお気持ちを本日さらに深く胸に刻み込んでまいります。

ここに、医学・歯学の教育・研究・臨床の発展のために一層の精進を重ねることをお誓いするとともに、ご献体下さいました方々のご冥福をお祈りしつつ、深甚なる感謝を込めて私の追悼の言葉とさせていただきます。

令和三年二月十五日



感謝のことば

東京医科歯科大学 学生代表

歯学部歯学科 二年 小倉 佑太

はじめに、ご遺骨返還式にあたり、ご献体してくださった方

並びにご遺体を私たちに預けてくださったご遺族の方々に深く感謝の意を表するとともに、謹んで故人のご冥福をお祈り申し上げます。

現在私達は、解剖学・組織学・発生学・生理学といった専門分野の学問に励んでおり、医療人へのステップを一步一步積み上げているところです。今私達が学んでいる基礎医学は、医療人の卵として損傷・疾患に対する理解や治療技術の習得の礎となり決して欠かすことのできない知識です。人体解剖実習では、人体の構造に関する理解を深める上でかけがえのない貴重な体験をさせていただきました。実習の前段階では、脈管系や神経・器官などの位置関係や機能などを、主に座学の授業で知識を得ていました。実習に取り組み直前は、座学の授業だけでは出来ないような学びの機会となることに期待を膨らませていました。

しかしそれと同時に、実際に解剖を行うときにはどのような場面に出席だろうか、うまくやっていけるだろうかといった不安も同時に感じていました。

実習初日、私達はご献体してくださった方々と対面致しました。実際に解剖を進めて驚いたのは、座学で学んだことや教科書の図と比べて、この目で見た人体の構造が想像と違い異なっていたことでした。人の身体というものはそれぞれ異なるということは以前から分かっていたのですが、改めて見てみるとやはりそれぞれ違う構造を持ち、異なる

る個性を持った人間なのだとしみじみ感じました。一人一人に真摯に向き合い、心に寄り添えるような医療人になりたいと誓った瞬間となりました。

緑のシートをめくった先に見たご遺体から、自分の中の人生観が大きく変わったように感じました。目の前のご遺体はただ身体として存在しているのではなく、私達が今まで生きてきた年数よりも何十年も長い時を経て、誰かとともに泣いたり笑ったりした思い出が積み上がった、まさに人生の軌跡として存在しているのだと感じました。それと同時に、将来患者さんが幸福な人生を送れるよう支えることのできる医療者になる未来を見据えることで、改めて我々の今の立場を再認識するようになりました。その未来を叶えられるように自分は何のために医療者になりたいのか、自分にできることは何か、社会において十分に役割を果たせるように自分自身を見つめ直し、考えるきっかけをこの実習は与えてくれました。

ご献体してくださった方々やご献体に同意してくださったご遺族の皆様が、どんな思いで私達にご遺体を預けてくださったのか、その問いについて考えない日はありませんでした。

解剖実習で得た学びを最大限に活かして医学・歯学の発展に繋げ、今まで以上に多くの患者さんを癒せる社会を築き上げること、それが私達に課された使命なのではないかと感じ、日本ひいては世界の公衆衛生の向上という大きな使命を背負っているのだと悟りました。ご献体してくださった方々にご遺族の方々の思いや、癒しを求める数多くの患者さんの気持ちを重く受け止め、私達は解剖実習に取り組みました。厚い愛情と高い治療スキルを兼ね備えた医療者を目指し、何事も積極的かつ主体的に学ぶ姿勢を維持していこうと思います。

結びに、ご献体してくださった故人の方々のご冥福をお祈り申し上げるとともに、ご遺族の皆様のご健勝を心からお祈り申し上げまして、追悼の言葉とさせていただきます。

東京医科歯科大学篤志献体活動の報告会ならびに 東京医科歯科大学献体の会総会

新型コロナウイルス（COVID-19）の感染拡大、ならびに大規模なイベントの中止・延期・規模縮小を要請する政府の基本方針に鑑み、開催中止。

令和三年度 東京医科歯科大学解剖体追悼式

令和三年十月二十八日木曜日、午後一時より、築地本願寺において、東京医科歯科大学解剖体追悼式が行われました。今年度も、新型コロナウイルスの感染防止対策として、参列する学内関係者および医学部学生の人数を制限しての開催となり、追悼式の様子はインターネット上でライブ配信されました。

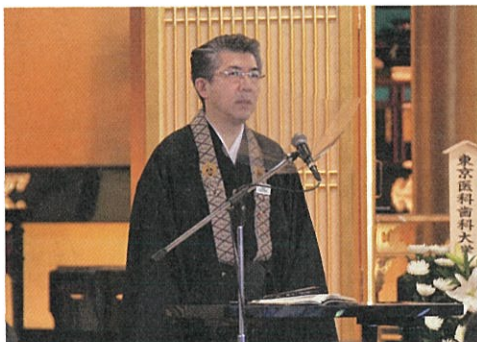
はじめに、今年度に誓願成就された二七二柱（病理解剖・法医解剖含む）の氏名が奉読されました。そのお名前は、お一人おひとりの人生の象徴であり、参列者は、今は旅立ってしまった方々の人生に思いを馳せました。

全員で黙祷を献げた後、追悼の辞は、東京医科歯科大学学長の田中雄二郎先生から、続いて献体の会会長の佐藤達夫先生より追悼の言葉が述べられました。

学生代表の歯学部二年生の長谷川海翔さんからの追悼の言葉では、「二人一人のお体に向き合っていかなければならないのだ、という一見当たり前のようなことを強く深く認識させられました」という、医師・歯科医師を志すにあたっての強い覚悟が述べられました。

参列者全員が献花を終えた後、閉会となりました。

続いて、本願寺のご厚意による法要が行われました。参加者は浄土真宗本願寺派の作法によるお焼香の後、副住職よりご法話をいただき、午後二時半過ぎに終了となりました。



副住職によるご法話

追悼の辞



東京医科歯科大学長 田中雄二郎

本日ここに、国立大学法人東京医科歯科大学解剖体追悼式を挙げるにあたり、解剖学・病理学並びに法医学解剖に、ご遺体を捧げてくださいました二七二名の方々に對し、謹んで哀悼の意を表すると共に深い感謝の念を捧げるものであります。

本来であれば、ご遺族及び献体の会の皆様に、この築地本願寺にて、直接ご挨拶を申し上げたいところですが、新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点から、今年度は学内関係者のみでの開催とし、本式典の様子はWEBにて配信させていただくことといたしました。

人体解剖学は、医学・歯学の次世代を担う医療人の育成に当たって誠に重要な意義を持っております。

解剖学実習では、学生は「ご遺体を通して人体の構造や機能の基礎を習得しつつ、初めて、死という逃れようのない生命の尊厳に直面します。これを機に、学生は「自分自身が快適に生きたい」という受動的・利己的な意識から、「自分以外の人が快適に生きるために」という能動的・献身的な思念に変わり、自分たちは「世のため人の為に医学・歯学の道で研鑽を積むのだ」と、医療人としての決意を新たに、学んでいくこととなります。

病理解剖では、担当の医療チームが現代医学の叡智を駆使し、全力を挙げて治療に臨んだにもかかわらず、効を奏さず、ご遺族の願いも虚しく、帰らぬ人となったご遺体を解剖させていただきました。ご遺体より提供された病巣や臓器の精査と治療結果から知り得る新しい知

見は、同じように悩む他の大勢の患者さんの治療あるいは発症予防に役立てることが出来る貴重な示唆を与えてくださいます。

また、法医学解剖は、黙して語らぬご遺体の死因を特定し、時には犯罪性の有無を明らかにして、社会の秩序の維持に役立つものであります。

このように、それぞれのご遺体は、それぞれの立場で医学・歯学の進歩に光明を投げかけて下さり、そして人間教育の上で、何ものにも変えがたいご教示をいただき、学生の蒙を啓いてくださいます。

医学・歯学の発展のためとはいえ、自らご遺体を献体される崇高純粋な精神、そしてご遺族の示される深いご理解とその寛容なお心に、私どもは改めて深甚なる感謝と敬意を表し、また、心を新たに、一意専心医学・歯学の教育・研究に一層の精進を重ねることを、固く誓うものであります。

東京医科歯科大学は、菊薫る本日、ご遺族並びに献体の会会員の方々、そしてご来賓の方々とともに、ご遺体を賜りました故人の方々に偲び、ここに謹んで追悼の辞といたします。

令和三年十月二十八日



「解剖献体者之霊」の標柱

追悼の言葉



東京医科歯科大学献体の会長 佐藤 達夫

本日、ここに令和三年度東京医科歯科大学解剖体追悼式が執り行われるにあたり、来賓の意を体して追悼の言葉を申し上げます。

近代医学は、人体を科学的研究の対象としたときに始まると言われますが、肝心の人体そのものの構造の追及は長くなおざりにされたままでした。かのルネサンスは、人間の探求を頭でつかちに思索する態度から抜けだして、実証的学問に転換させ、さらにその考えを文化一般に及ぼそうとした点でまことに革新的でありました。そして最も実証的科学的の芽生えとなったのが人体解剖であります。病気の原因を追及する病理解剖も、亡くなられた方々の人権を擁護する立場に立ち護民官の役割を果たす法医学解剖もこの延長線上に育成されてきたのであります。人体解剖は近代医学の出発点であり、追悼式は、医学・歯学・医療科学を学ぶ者が新しい人間科学を創造しようとするときに、立ち戻るべき精神的拠り所といえるのです。

しかし人体の解剖の対象はわれわれの身体そのものであります。ご本人のご遺志はもとより、ご遺族の、社会の、そして行政の理解があつてはじめて解剖が可能となるもので、決して容易なことではないはずであります。それでも長い歴史を経て、現在では、広い理解が得られるようになりました。人体解剖が、そして献体が、次世代の健康に寄与したいという尊い願望からなり、言い換えれば、自己中心の愛情がそこにとどまらず他者包含へと広がりを見せているからにほかなりません。亡くなった方々の願いは解剖を通じて、我々のもとに生きて還つ

てくるのです。そのような考えが人々の心に浸透しました。それが献体思想であります。いまや人体解剖は、人体を実証的に知るといふ科学的態度を超えて、明日の医学への創造という地平を開いたのであります。

われわれは、献体された方々の優しい気持ちを受けとめなければなりません。そして東京医科歯科大学の学生諸君は優れた教職員の指導と支援のもとに、献体された方々の尊く、そして優しいお気持ちをしっかりと受けとめてくれます。献体が、これから医療の実践に羽ばたく学徒に、知識獲得という枠を越えて、科学の目と人の心を兼ね備えた膨らみを与えてくれることと信じるものであります。献体なされた方々が果たされた実に大きなお仕事に心から敬意を表します。あわせて、肉親を失った悲しみの中で、献体者のご遺志を、そして主治医の願いを尊重してくださったご遺族の皆様にご感謝申し上げます。追悼の言葉とし、あわせて本日ここに示されました東京医科歯科大学のお心遣いに敬意を表するものであります。

令和三年十月二十八日



追悼式会場の築地本願寺



焼香の様子

追悼の言葉



東京医科歯科大学 学生代表

歯学部歯学科二年 長谷川海翔

まず初めに、東京医科歯科大学の学生を代表し、ご献体してくださった方々に心から感謝申し上げますとともに、ご遺体を私たちに御預けくださったご遺族の皆様方に謹んでお悔やみ申し上げます。

私たちは、今回の解剖実習を通し、教科書だけでは決して理解しきれない人体の構造など、未来の医師・歯科医師として必要な知識のみならず、一人の人間としても多くのことを学ばせていただきました。

私たち医学生、歯学生は、医師及び歯科医師を志すものとして、生涯にわたって知識を身に着け、また研鑽していかなければならず、更に高い倫理観も必要とされます。その知識は多岐にわたり、また深く習得していかなければならないのですが、その知識量と比べ、医師、歯科医師として身につけなければならない倫理観を培う科目の数は限られていると言わざるを得ません。そのため、私たちは当初何を志して大学に進んだかを忘れ、その膨大な知識をただひたすら詰め込んでいるだけという状況に陥りそうになります。

しかし、そんな私たちが医師、歯科医師への志を忘れずにいられたのは、他でもない、解剖実習のおかげだと強く感じます。黙祷に始まり、ご遺体にメスをいれることで進む解剖実習は、命の尊さ、そして医療従事者となることの責務を常に感じさせるものでした。

解剖実習はまさに悩みと試行と感動の連続でした。教科書などで予習して取り組んで解剖をしても、実際のご遺体の構造ははるかに複雑で、「人体の構造は一人一人違っており、そのすべてが一致するわけ

ではない」「一人一人のお体に向き合っていかなければならないのだ」という一見当たり前のようなことを強く深く認識させられました。実習時や予習復習時に、ご遺体がどのような方だったのかと思いをはせるたびに、人の命、そして人生について、言葉では言い表せないような感慨を覚えました。

医師・歯科医師は人の命と常に向き合っていかなければならない職業です。解剖実習は、人体の構造という根幹となる知識を習得するだけの実習ではなく、人として、医療従事者として身につけなければならない倫理の実習であったと強く感じます。将来、自分が人の命に関して大きな出来事に遭遇した時、自分が何を考え、どう行動するのか、その原点となるのは間違いないこの解剖実習であると確信しています。改めて、このような機会をいただけた事に深く感謝申し上げます。

最後になりましたが、ご献体してくださった故人の皆様を偲ぶとともに、ご遺族の皆様のご健勝を心から願ひ、追悼の言葉とさせていただきます。

令和三年十月二十八日



学生による献花の様子

《篤志解剖全国連合会関係行事》

篤志解剖全国連合会

第四十五回団体部会・大学部会合同研修会ならびに第五十一回総会

令和三年四月一日、篤志解剖全国連合会第四十五回団体部会・大学部会合同研修会ならびに第五十一回総会が、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）対策により、会場（名古屋大学）開催は中止となり、紙面開催されました。

次回は大阪府立大学医学部にて開催予定をしております。



《会員寄稿》

【随筆】

「墓じまい」のこと

1304 中村 和子

思いがけない新型コロナウイルスの蔓延は、今年（令和三年・二〇二一年）になって衰えるどころかますます世界中を荒らしまわっており、私たちは、もう長いこと自粛生活を余儀なくされている現在です。

こうしたなか、ホッと胸をなでおろしていることがあるのです。それは、数年前無事に「実家の墓じまい」を終えることができたということです。これもみな、北海道・帯広に住んでいるとこの博子さんと信幸さんの並々ならぬご助力がなければ実現できないことでした。お二人に心からの感謝を申し上げます。

本当にありがとうございました。

「墓じまい」、この耳慣れない言葉は、墓の跡継ぎをする家族や、墓守りをする人がいないなど事情で最近注目されています。

私の場合も、実家の家族が亡くなるなどして墓守りが出来なくなりましたので。こうした訳で墓じまいを決心しました。

まず、墓じまいの実行の方法を、お墓のある所在地、北海道・本別町の役場に聞いたところ「墓地は町営なので、すべて撤去して更地に戻して町へ戻してください」とのことでしたので、直ぐ役場から墓地改葬届・許可申請書を送ってもらい、実行日、氏名、住所など必要事項を全て記入して申請しました。直ぐに公印のついた改葬許可書が返送されてきましたので、その書類を持って羽田空港から北海道・帯広空港へ向かいました。数年前の七月のことでした。本別は、帯広の近くです。

空港には久しぶりに会う二人のいとこが、自家用車で待っていてくれました。驚いたことに空港からわが故郷・本別まではもう列車の路線も廃線となり、車を中心となっているとのこと。結局いとこの車で約二時間で本別役場に着きました。

早速、許可書を提出し、ハンコをもらって、いよいよ墓地へ向かいました。約三十分で到着。久しぶりのご先祖様・両親たちは、安心してよくに迎えてくれました。既にお寺さんと石屋さんは待っていて下さり、直ぐにお寺さんの最後の読経が始まりました。

しばし、静かな刻が流れました。北国の青い空、いろいろの思い出が次々と浮かびました。思い起こせば、父の両親たちは百数十年以上も前、北海道開拓団として、本州は新潟県からこの北海道に渡り、苦労を重ねて今、ここに眠っているのです。

両親はこの地で生まれましたが、昭和初期の頃（一九二〇年）、本州へ（内地と言った）渡り、仕事をし、私も生まれて終戦（一九四五年）まで、横浜で暮らしていましたが、その年の四月、米軍による空襲で焼け出され、両親は当時八歳の私と四歳の弟を連れて、この本別に避難してきました。

私は、当時横浜市立平安国民学校の三年生でしたので、昭和十九年から始まった文部省令による「国民学校三年以上の児童・生徒で地方に縁故のある者は『縁故疎開』をさせよう」という「縁故疎開」だったのです。

私達は、戦後しばらくの間祖母と暮らしましたが、一家はその後再び横浜へ戻りました。そして、月日は過ぎてしまい、現在はお墓と私だけが残ってしまったのです。

とうとう、墓石がはずされました。

石屋さんは、はずした墓石をトラックに乗せ、更地となった墓地から去って行きました。

最後は、両親のお骨のみお寺さんの新しい納骨堂に納めさせていた

だき、残りは全部、墓地の一角にある共同墓地へ埋葬させていただきました。

これで終わったーと思った時、遠くから北国の風につれて、両親の声が聞こえた？ ような気がして動けませんでした。

「和子、よくやってくれたねー。」

父さんも、母さんもうれしいよー。

安心してゐるから、お前も元気だなー。

ありがとうなー。」

父さん、母さん、ありがとうございます。

北国の優しい風と香りにつつまれて、一句うかびました。

北の空 夏草香る 墓じまい

帰路は、札幌のいとこ宅に泊まらせていただき、「墓じまい」を報告いたしました。

翌日、千歳空港から、帰宅の途についたのでした。

こうして私の手で「墓じまい」させていただき、感謝申し上げます。皆様、ありがとうございました。

合掌



「アーウ」ちゃんとのんちゃんの不思議な出逢い

3186 三浦 教子

旧足立区での生活二十三年の内に出会った、誠に不思議な事柄に是非、耳を傾けて下さると幸福です。

亡き夫が脳梗塞を発病し、介護三昧のある日のこと。私が設定したりハビリ予定表を記し、その日から実行しようと、私もがんばろうと二人で早朝に散歩をはじめました。水元公園近くの桜並木、すごく美しく日本人なら感動するその桜の木の上、たしか寒い二月でしたかしら。その桜並木の下を二人で歩き景色をながめつつ、歩いていました。すると突然、桜の木の上から「アーウ」「アーウ」「アーウ」と叫ぶのです。たしか午前五時頃でした。それが今回の主人公「カラス」の「アーウ」ちゃんでした。それから、数か月「アーウ」ちゃんに見守られながら特訓したものの、その内亡き夫は他の病名で入院しまして、私もその病院での介護と自宅の生活でかなり身体も疲れてました。

ある日の出来事です。私は入浴してました。昼間でした。その時、けたたましくマンション八階の浴室の外の扉から聞こえるんです。「アーウ」「アーウ」「アーウ」と大声で泣き叫ぶんです。私は心のどこかで、まさか「アーウ」ちゃんが私の家に分かるはずがないと、バスタオルに身をくるみ扉の間隙から見ると、まさしく「カラス」のアーウちゃんでした。私の家がどうして分かるの？なぜ、なぜ、と私は放心状態でした。やはり私は夢を見てるんだ、と。

しかし、洋服に着替えベランダに出ましたところ、電柱にとまり、「私を見て、アーウちゃんよ。」と言っているみたいでした。人間とカラスの誠に不思議な物語でした。アーウちゃんは亡き夫を元気づけてくれ、私にも元気を頂き、早朝の訓練を「カラス」に励まされるとは思ってもみませんでした。ありがたい事です。

人間には献体制度がありますが、動物や鳥類にはありません。将来はあるといいですね。



撮影 時田 義彦

健体を献体く人流・コロナ禍の街

3941 吉本 亮三

『街』の人流のバロメーターに渋谷スクランブル交差点が連日映し出される。増加したり減少したり、何なんだろう、このコロナ禍対応のちぐはぐさは。今の日本は人流の増える五輪開催と、人流を抑制したい新型コロナ対策に総力をあげて取り組む『二兎を追う』こととしている。日本政府は国民の命・健康を守ってくれるのだろうか。その力と意思が決定的に欠けている。PCR検査数も、ワクチン接種のスピードも日本は先進国で最下位である。世界最高レベルだと自認してきた日本の医療体制はコロナ感染が少し広がっただけで崩壊状態となる見掛け倒しの代物だった。

東京五輪誘致時に唱えた復興五輪・コンパクト五輪のメッキがはがれ、「コロナに打ち勝った証」も消え今は、五輪は政権を維持する総選挙のための道具でしかない。

東京五輪・パラリンピックには世界中から選手が一万五千人、約八万人の大会関係者が来日し都内や近郊に滞在する。七万人のボランティアをはじめ食事や清掃、輸送、警備など大会を支える人々が選手村や会場などに入りし、街中は人流が短期間に集中し感染リスクが爆発的に増加する。

政府の新型コロナウイルス感染症対策分科会尾身茂会長は国会でパンデミックのところで五輪をやるのは『普通ではない』と指摘し危機感を強めた。専門家有志で「無観客が望ましい。有観客なら基準を厳しく」等開催した場合の感染リスクと対応策を複数提言したが菅総理も組織委員会も聞く耳をもたない。現実に三回目の緊急事態宣言解除前より感染者数は下げ止まり増加に転じ、解除で緊張感が一気に緩み飲酒もOKとばかりに街に人流が増えている。開会一か月前の六月

二十三日新規感染者一七七九人中埼玉 千葉 東京 神奈川の一都三県で六割を占めて影響力大の地域を中心に第五波に突入している。しかも二十代・三十代がメインの感染力が強烈なデルタ株への移行が顕在化だ。夏休みやお盆帰省、人流・接触機会や飲食の機会が格段に増加するに加えオリンピック祝宴ムードでの街中の人流増は確実に、史上最悪のパンデミック襲来だ。

先般のG7で菅総理は、万全な感染対策を講じ準備を進めていくので強力な選手団を派遣して欲しいと呼び掛け、新型コロナに打ち勝つ世界団結の象徴として、安全・安心な形で東京五輪・パラリンピックを開催することに対する支持を改めて表明する」との結語を得た。何としてでも東京五輪・パラリンピック開催へと突き進んでいる。参加選手の行動ルール「プレーブック」で、人流に関連する選手等の動きを制約するとしているが実効性は疑問視せざるを得ない。重大な違反者は国外退去など厳しい制裁を科すことや、監督者の同行やスマホ・GPSで行動管理し、違反には制裁金、参加資格の剥奪、国外退去措置などを科すとしている。選手らの行動について、範囲を宿泊施設や練習会場、試合会場に限定。公共交通機関を使ったり、観光地や飲食店に出かけたりすることは禁止。海外からのお客さんにこの監視は不可能で、実質的には野放しだろう。

前東京五輪大会は三波春夫の東京五輪音頭「待ちに待った世界の祭り／西の国から東からトントントントント．．．」と歓迎されたが、今回は出国前からチェック、入国後隔離、行動制限、違反者は犯罪者で罰金や強制退去にもなる。五輪の理念がいつしか「コロナ禍」まみれで不信感蔓延である。一八〇〇ベッドのオリンピック村は祝祭の場から違反者摘発や収容所に、勝利の美酒も負けた涙酒もバツ、誘致のキーワード『お・も・て・な・し』はなくなってしまった。

前号でトリアージの海外事例で病院に患者が溢れ高齢者が着ける人工呼吸器を若者に付け替える事態もあったが、我が国ではこうした状

況にはなっていないとされていた。しかし地域によっては実質的な医療崩壊があったと言わざるを得ない。

そして医療の対応能力を超える患者が生じ、治療に優先順位をつける「トリアージ」は起きている。人工呼吸器を使わず、転院先見つからず、限られたベッド「誰を優先するのか・・・」、コロナ病床逼迫なぜ重症者向けが手薄 転院調整に滞り等々、報道の見出しだ。トリアージが必要な状況では、回復する可能性の低い患者より可能性の高い患者を選び、人員を割いてECMO（体外式膜型人工肺）や人工呼吸器を装着するという難しい判断となる。安楽死で医師の罪が問われることがある日本では難しい。判断根拠となる科学的なデータがあることは重要、年齢以外の要素も公平に扱われるべきだが・・・一般的には年齢制限が最優先か？

感染状況の人流バロメーターの渋谷スクランブル交差点に私は行かない。危険な人流にさらされたくない。悪くすると「早く逝って」と選別されるトリアージ対象最優先の末期高齢者だ。しかも献体の会では「重症の感染症の場合は献体をお受けできない場合もある」としている。「健康に生き、健康で逝く」そして「健体を献体する」の自分の命題が不可になる。人流の多い『街』に行つて新型コロナに罹るわけにはいかない。

(令和三年六月二十六日)



かめどん

どーん どん どん かめどんどん
いつも おいしくごはん食べ
どーん どん どん かめどんどん
どっしりしているかめさんは
静かに みんなを見守ってる



5239 岡本 祐子

《かめどんについて／私がお部屋をお借りしている大家様は、三世代の大家族でいらっしやいます。

お孫さんが小学生の頃、まだとても小さい亀さんもファミリーの一員となりかれこれ一五年以上になるそうです。

どっしりとした存在感のあるこの亀さんを「かめどん」と呼んで私はまだ一年経たないのですが、とても穏やかな性格の持ち主で人懐っこく優しい表情にコロナ禍で疲弊した心も和み、日々癒されております。》



撮影 時田 義彦

【詩】

『けんたい』

九〇才の思いのなかに
 まだ
 果すことが 残っている
 この思いが
 晩秋の日常に
 やすらぎを もたらす
 やがて
 自然の摂理に 添われて
 成すために いきたい

2403 照井 きぬ

【詩】

献体の会に結ばれて生きてきて
 学びを受けて心安らぐ
 在りし日の面影偲ぶ朝な夕
 成すこともなく年を重ねて
 松生けて白梅添えてくる年に
 思い深めて力湧きくる
 松ながめ年越しそばに舌鼓
 声の届かぬ家族偲ひて
 訪うことも訪われることもなきままに
 幼き頃の呼び名懐かし

4296 富沢 静子

【短歌】

4936 内田 敏行

老いていま 喜怒哀楽の あれやこれ 思いおこすは セネカのこ
とば

※セネカ 古代ギリシヤ『人生の短さについて』の著者

散歩道 今日も出会う 雀たち 寒さしのいで われと待て春

この世とな 生あれば死と 宇宙の理 永遠なるものは 冥界にあ
り

※冥界＝カオス

【短歌】

5384 衣笠 紀子

認知でも 眠っていても 名を呼べば おいしい 口する 条件反
射

春風に さそわれて行きし お花見も 母の記憶は つかの間の夢

母の顔 元気がないのが気になるも いつもおの様に 施設去る

コーヒーを 飲むでもないし 無言でも 二人の時は あつという
間に

年かさね 貴方の思かげ 若き日の心に残りて いつまでも

【俳句】

988 真柄百合子

霊力の さづかるほどの 石楠花を
あの世から 母の送りし 落し文
考えぬきし 結論大事 古梅酒
詰め将棋の 手順確認 濃紫陽花
遠き日の 出逢ひの地にて 喰ふメロン

【俳句】

528 新島 里子

俳諧を 心の杖に 春野行く

巳どしの 我逢へば蛇さん こんにちは

謝々と鳴く 中国渡来の 蟬なるか

暑にめげず 俳諧やくざと いふ余生

牡丹の ひとひら散つて 風となる

【俳句】

4242 堀田 満

スマホ禍も 追い討ちかける 彼岸かな
踏みそうになるタンポポの 日和かな

【俳句】

いづこまで 我が身のさだめ 気になるわ
 退院の日 看護師達の声すずし
 秋の日に 美人の姿 女学生
 記憶とは うすれ行くなり 淋しさよ
 安楽死 夢見てスイス 遠きかな

4302 岩崎 治子

【俳句】

梅丸く 膨み割れて 息を吸う
 ほろ苦く 黄色いアナタ 菊おひたし
 若者に わかるまいよ 甘干柿
 コスモスを 気取るオンナ 曼珠沙華
 あの人が 好むあの子 秋の蝶

5095 山口みどり

【俳句】

紫陽花の 色とりどりに 雀の子
 青天の つばめとぶよう 真つさららに
 金鳳花 母を背負いた 道想う
 つゆくさの 風のまにまに 負けじとな
 青風に 吹かれし心 満月の

6277 濱田裕紀子

【川柳】

盲導犬 見ると涙腺 ゆるみ出し
 眼鏡マスク 挨拶されて 誰だっけ
 義理かいて どれも コロナの せいにする
 杖をつき 変わる信号 悠然と

5699 水谷喜多子



《東京医科歯科大学献体の会会則》

(名称・事務所)

第一条 この会は、東京医科歯科大学献体の会(以下「本会」という。)と称する。

第二条 本会の事務所は、東京医科歯科大学医学部に置く。

(目的・事業)

第三条 本会は、会員相互の親睦を図るとともに、医学及び歯学の発展と人類の福祉に貢献するために、会員の遺体を無条件、無報酬で東京医科歯科大学に寄贈することを目的とする。

第四条 本会は前条の目的を達成するため、次の各号に掲げる事業を行う。

- (1) 篤志献体に関する広報活動
- (2) 親睦会の開催
- (3) 講演会及び集会の開催
- (4) 会報の発行
- (5) 献体者の慰霊
- (6) その他本会の目的達成のため役員会において適当と認めた事項

(会員)

第五条 本会の会員は、第三条の目的に賛同し献体登録した者とする。ただし、この趣旨に反すること、又は本会の品位を著しく傷つける行為のあるときは、役員会において役員の三分の二以上の議決により、会員の登録を取り消すこともある。

第六条 本会に次の役員を置く。

- (1) 会長
- (2) 副会長 二名
- (3) 理事 若干名

(4) 監事 二名

2. 理事となる者は、役員会で選考し、総会の承認を得る。
3. 理事の任期は、二年とする。ただし、再任を妨げない。
4. 会長及び副会長は、理事の互選とする。
5. 会長は、本会を代表し、会務を統括する。
6. 副会長は、会長を補佐し、会長に事故のあるときは、その職務を代行する。
7. 理事は、役員会を構成し、会務を遂行する。
8. 監事は会計を監査するほか、役員会に出席して意見を述べることが出来る。

(会議)

第七条 本会の会議は、総会及び役員会とする。

2. 総会は年一回開会し、会長がこれを招集し、その議長となる。
3. 総会においては、次の事項を審議する。

- (1) 会の運営及び事業に関する事項
- (2) 理事の承認
- (3) その他の事項

第八条 役員会は、会長が必要と認めたととき随時開催し、次の事項について審議する。

- (1) 会の運営及び事業計画
- (2) 収支予算に関する事項
- (3) 会の決算及び事業報告
- (4) その他会長が必要と認めた事項

2. 役員会の議事は、出席者の過半数をもって議決する。

(顧問及び相談役)

第九条 本会に、顧問及び相談役を若干名置くことができる。

2. 顧問及び相談役は、学識経験者、理事退任者の中から理事会に諮り会長が委嘱し、必要に応じ理事会に出席し意見を述べる。

(会計)

第十条 本会の経費は、補助金、寄付金等をもってこれに当てる。

2. 会の会計年度は、四月一日から翌年の三月三十一日までとする。

(その他)

第十一条 本会則の改正は、総会の議を経て定める。

附則

この会則は昭和五十九年四月二十一日から施行実施する。

この会則は昭和六十二年四月十八日一部改正実施する。

この会則は平成十四年四月一日より改正実施する。

《東京医科歯科大学献体の会役員》

会長	八一〇	佐藤	達夫
副会長	二八四四	兵頭	作一
副会長	二二七二	星野	君枝
理事	九二二	宮内	美栄子
理事	二七四二	片野	尚子
理事	四五六二	飯田	静夫
理事	四七八五	磯	秀夫

《東京医科歯科大学からのお知らせ》

◎住所変更等の連絡のお願い

住所、氏名、電話番号、ご家族の連絡先等が変更になった方はできるだけ早く献体事務室まで、お電話または文書等によりご連絡お願いいたします。

会員ご本人が遠方へ住所を移される場合には、献体登録を住所地の近くの大学にご紹介する場合がございます。大学からの距離が非常に遠い場合にはお引き取りできない場合がございます。また、お亡くなりになった後に他の大学にご紹介することは、非常に難しいので、住所を移される場合には献体事務室にご相談いただきたいと思います。皆様のご協力をよろしくお願い申し上げます。

◎献体手帳について

二〇二二年「献体手帳」をご希望の方は次の要領でお申し込みくださいますよう、よろしくお願い致します。

「献体手帳の申し込み方法」

お名前・会員番号をご明記の上、送料として九四円分の切手を同封の上、郵便にてお申し込み下さい。お申し込みは、お一人様一冊とさせていただきます。

なお、ご家族で会員の方が一緒に申し込まれる場合、二冊分の送料は一四〇円となります。三冊以上の方は事務室へお問い合わせ下さい。

申込先

〒一三三八五一九 東京都文京区湯島一―五―四五

東京医科歯科大学大学院 臨床解剖学分野内

「東京医科歯科大学献体の会」事務室

電話 〇三―五八〇三―五一四七

《会員のびご家族へのお願い》

会員の方が亡くなられた時は、次の順序でご連絡と打ち合わせをお願い致します。

一、大学への電話連絡

◎平日 午前八～三〇～午後五～〇〇

①東京医科歯科大学献体事務局(直通) 〇三―五八〇三―五一四七

②東京医科歯科大学(代表) 〇三―三八一三一六一

平日の勤務時間内出来るだけの対応を致しておりますが、直接献体事務局に連絡をいただいた時、学内に出かけている場合がございます。その時には大学(代表)の電話交換手にその旨をお伝え下されば、こちらから再度ご連絡申し上げますので、ご遺族代表者の連絡先及び亡くなられた方の会員番号・氏名・死亡日時をお知らせ下さい。よろしくお願い申し上げます。

◎夜間・土曜・日曜・祝祭日・年末年始

東京医科歯科大学(代表) 〇三―三八一三一六一

夜間、土曜、日曜、祝祭日、年末年始などの場合は、大学の電話交換手にその旨お伝え下されば、担当者の携帯電話に連絡がつく状態になっております。その際、亡くなられた方の会員番号・氏名・死亡日時・連絡先・連絡者を必ずお知らせ下さい。担当者が学外におります場合には、東京医科歯科大学献体の会の会員であることをすぐには確認できませんので、ご連絡の前に会員であることを再度ご確認頂きますようお願い申し上げます。なお、迅速に対応できるように状態をとってはおりますが、諸事情(電波受信の状態が悪いところにいる場合など)により担当者からの連絡が遅れる場合がございます。大学から、担当者へは連絡がつくまで対応いたしておりますので、ご容赦願います。

二、大学担当者との打ち合わせ

ご遺族の代表者は次のことを担当者として打ち合わせて下さい。

- ①大学がご遺体をお迎えにあがる日時
- ②大学がご遺体をお迎えにあがる場所(住所・電話番号)
- ③お棺持参の要否

④ご遺族代表者の氏名、住所、電話番号

⑤「解剖に関する遺族の承諾書」等の書類は、担当者が後日お送り致しますので、ご記入、ご捺印をお願い致します。

⑥その他：お通夜、告別式をなさる場合にはその日時・場所をお知らせ下さい。なお、ご遺体の移送は大学がお引き受けし、寝台自動車でお迎えに上がります。

三、ご家族に用意していただく書類

○ご遺体移送のときに必要な書類

死亡診断書の写し 一通

・死亡診断書の写しをご用意下さい。ご遺体を寝台自動車で移送するときに必要になります。

○後日、郵送していただく書類

埋葬・火葬許可証 一通

・埋葬・火葬許可証は担当医師の死亡診断書を添え「死亡届」を市区町村へ提出すると交付されます。

・なお、火葬予定場所には「渋谷区代々幡斎場」とご記入下さい。

※注意事項

次のような場合、献体をお断りすることがありますので、ご了承下さい。

- ①事故で亡くなられた場合(交通事故死、水死、焼死、災害死など)
- ②死亡後、時間が経過し発見が遅れた場合

- ③ 病理解剖や法医解剖によりご遺体にメスが入った場合
 ④ 旅行中など、大学から非常に遠い場所で亡くなられた場合
 ⑤ 大学から非常に遠い場所へ転居され、住所変更のご連絡がないまま転居先で亡くなられた場合
 ⑥ 死亡後、臓器提供をされた場合
- なお、重症感染症の場合も献体をお受けできないことがありますので、担当者とも相談ください。

《会報製作にあたって》

◎写真の説明

山里の朝

撮影 東京医科歯科大学歯学部卒

ときた歯科クリニック院長 時田 義彦

「山里の朝」は合掌造り集落で知られる白川郷で撮影しました。

季節は初冬、山々に囲まれた小さな集落に到着すると天気はあいにくの雨。夜半に雪へと変わり、翌朝陽が昇ると一面の銀世界が開けました。山々の樹々に降り積もった雪が朝陽を浴び、あたかも桜が咲いているかのような錯覚を覚えます。傍らの小屋には来るべき冬の備えとして真新しい薪が積まれ、山間の人々の厳しい暮らしが垣間見えます。

この白川郷、日本有数の豪雪地帯でかつては陸の孤島と呼ばれてきました。周辺地域との交流が完全に遮断されてしまうのがその理由ですが、必然的に集落内での自給自足が強いられ、それゆえ人々の相互扶助の精神は非常に強固なものでした。

このような人と人の繋がりを現代人は忘れてしまったという批判をよく耳にしますが、それは人類が弛まぬ努力で周囲の環境を安全で過ぎしやすいものへと作り変えてきたからに他なりません。ひとたび存亡の危機に陥ったらどうなってしまうのか。昨今のコロナ禍で三密回避・ソーシャルディスタンスなど「絆」と逆行するような行動が推奨されています。この難しい局面で、一見矛盾するような行動で、人々はいかに助け合い、絆を深め、コロナ禍を乗り越えていくのか。

その光景をカメラのフレームに収めてみたいと思うのは私だけでしょうか。

◎編集後記

今号の表紙は目にも清しい冬景色です。雪を被った茅葺き屋根は何やら人の姿にも似て。「ねえ、お母さん、帽子被った男の人が雪の中でブランコを漕いで歌うのって何だっけ。」「ゴンドラの唄？ 命短し、恋せよ少女(おとめ)。そこしか知らないけれど。」「いや、大ヒントだよ。黒澤明監督の『生きる』(昭和二十七年)だ。」

志村喬(たかし)演じる市民課長は「お役所仕事」三十年。地元住民(菅井さん)らが陳情するも、下水溜まりは土木課へ、とたらい回しです。ある日、胃の検査を受け、余命半年と悟ります。息子(金子信雄)にも打ち明けられず、パチンコ、キャバレーと遊んでも心は晴れず。焦る主人公に、工場でウサギのおもちやを作る元部下(小田切みき)の姿がまぶしく映ります。よく食べ、よく笑い、よく話す、あふれる生命力の源を知ろうと詰め寄ると、見開いた眼におびえるように絞り出された一言は「課長さんも何か作ってみたら」。

場面は一転して、主人公の通夜。同僚らの口から、あの下水溜まりを改善して公園が完成したこと、課長が関係者を説得して回った成果だった花落成式では末席だったことが語られます。しかし、焼香させてほしいとやってきた住民らが泣き、警官も最期の様子を涙声で伝えます。雪の降りしきる夜の公園で、ブランコをこぎながら楽しそうに歌う主人公。澄み切って響く「ゴンドラの唄」。

この映画にはもうひとつ名曲があるので。死ぬ前に一日でも生きて死にたいと願いながら何をしたらよいのかわからずいた主人公が自分にもできると公園造成を決意した時に聞こえる「ハッピーバースデー」。「命短し」とわかった上で、生きると決めた日が人生もうひとつの誕生日だというわけです。それゆえに、「生きる」を全うした日に降る雪は祝福の紙吹雪にもみえてきます。ぜひ、あらためて表紙の雪景色から楽しんでいただけたらと存じます。

(片野尚子)

献体の会会報編集委員

五二三九 岡本 祐子
五四八二 広田 順子

連絡先

発行	東京医科大学献体の会
〒	一一三―八五―一九 東京都文京区湯島一―五―四五
電話	〇三(五八〇三) 五二四七
FAX	〇三(五八〇三) 〇一一六
印刷所	小宮山印刷工業株式会社
〒	一六二―〇八―〇八 東京都新宿区天神町七八
電話	〇三―三三二六―〇一五二一一